



鷗外全集

第五卷

第五回配本（全三十八巻）

鷗外全集 第五巻

定價貳千圓

昭和四十七年三月二十二日 發行 ©

著 者 森 林 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

債鬼	ストリンドベルヒ	一
牛タ・セクスアリス		八三
ジョン・ガブリエル・ボルクマン		一八一
イブセン		三一六
シユレンテルのボルクマン評		三二七
鶏		三六一
建築師		三六七
金貨		三九三
團子坂		四〇一
サロメ	ワイルド	四五五
家常茶飯	リルケ	五〇九
現代思想		

金毘羅

靜

影

影と形

秋夕夢

ダヌンチオ

後記

五一九

五六九

五八九

五九八

六〇一

六四七

債鬼^{カウ・キョウ}

AUGUST STRINDBERG.

第一場

湯治場のホテルの廣間。奥にエランダ(外に向ひて造り出したる家の部分)に出づる戸あり。エランダの外の景色見ゆ。右手に寄せ卓あり。色々の新聞紙を載せあり。卓の右に長椅子。左に常の椅子一つ。舞臺の右手に隣の部屋に通ずる戸。○
畫工アドルフ、教員グスタフの二人、卓の右に立ちゐる。

畫工。(小さき彫刻臺の上に造りかけある蠟人形をいぢりゐる。傍らに兩方の脇の下に當てて突く丁字杖といふもの二本立てかけあり。)そして何もかも皆君のお蔭なのだ。

教員。(シガアをふかす。)馬鹿をいひ給へ。

畫工。いや。笑談ではないよ。妻が立つてから二三日の間といふものは、僕はぼんやりして長椅子の上に寝ころんだきりで、馬鹿らしい程戀しく思つてゐたのだ。言つて見れば妻は僕のこの二本の杖を持つて行つてしまつたやうなもので、僕は一足も一人で歩き出す氣になれなかつたのだ。そんな風で夜も晝もうとうとしてゐたが、次第に目が覺めるやうに今まで熱に浮されてゐた頭が元へ戻つて來た。昔思つた事を思ひ出す。何かやつて見ようといふ心持も出て來る。昏んでゐた目が又物を大膽に眞直に見るやうになつて來る。そこへ君が來たのだ。

教員。さうさ。僕の君に會つた時は君の様子が好くはなかつたよ。それに何しろ杖を二本突いてゐるといふ

わけだからねえ。だけれど僕がゐたので君が直つたのだなんぞと言ふのは違つてゐるよ。丁度君が落付いて男と交際してゐれば好くなる處へ僕が來合はせたのだ。

畫工。それは君のいふ通りに違ひない。僕は随分大勢の男の友達と附合つたものだ。さて妻を持つて見ると、

この撰りぬいた友達が一人あれば後は入らないものだと思つてしまつた。それから少し経つて僕は新しい人と知合になつて來た。さうすると妻が嫉妬を始めた。妻は何んでも僕を一人で占領してゐようと思ふのだ。それはまだ好い。新しく出來た僕の友達をも妻は占領しようとするのだ。そこで僕は一人ぼつちにな

つて、今度は僕の方で嫉妬をしなければ、ならないやうになつたのだ。僕は焼餅焼になつてしまつたのだ。教員。うむ。一體君は焼餅焼になる素質を有してゐる。

畫工。僕は妻を失つて了ひはしまいかと心配するやうになつた。そしてどうにかしてさうならないやうに豫防しようといふ氣になつた。君、變だらう。その癖僕は妻が友達の内誰かと通じるだらうなぞと思つたのではないのだ。

教員。さう。大抵亭主といふものは、そんな事は思はないものだよ。

畫工。實に變だよ。僕の心配はどうかして、友達が妻の意志を左右するやうになつて、そして間接に僕を左右するやうな事が出來て來はしまいかと思ふやうになつたのだ。さう思ふと何んだかゝても立てゐられないやうな心持がして來た。

教員。うむ。さうして見ると君と細君とは萬事に付けて意見が合はなかつたのだね。

畫工。さうだよ。こゝまで話した序だから一層の事何もかも話すから、聞いて呉れ給へ。(間)妻は獨立した考へを持つてゐる性だよ。(間)君、なぜ笑ふのだい。

教員。まあ。後を話し給へ。君の細君は獨立した考へを持つてゐる。そこで。

畫工。そこで僕のいふ事がどうも耳に這入らないのだ。

教員。その癖君でない人のいふ事が耳に這入るといふのだらうね。

畫工。(少し間を置く)さうだて。(間)何んだか僕のいふ事は筋が間違つてゐるからいけないといふのではな

くつて、僕が言ふからいけないといふやうに思はれたのだ。なぜといふのに、どうかすると僕がずっと前に言つた事を、妻が自分の言出した事のやうに主張する事がある。それから何か僕の言つた事をその儘友達に妻に話すと、妻が同意するのだ。まあ、誰のいふ事でも、僕のいふ事でさへなければ同意するといふ風なのだ。

教員。それでは夫婦仲が悪いといふわけかね。

畫工。だけれど、僕は幸福だとは思つてゐるのだ。何んにしろあれをと思つた女を妻にしたので。又あれより外に妻にしたら好からうと思ふやうな女はないのだからね。

教員。そして君は一度も離婚して自由な體になつたら好からうと思つた事はないかね。

畫工。さうさね。はつきりさう思つた事はつひぞないよ。だけれど若し一人身になつたら落付くだらう。樂

になるだらう。といふ様な心持のした事は随分あるよ。そこでどうかいふわけで妻がちよいと留守になる。さうすると馬鹿に戀しくて堪らないのだ。何んだか手か足かを持つて行かれたやうなのだ。馬鹿らしいけれど、あれは別な人間でなくつて、何んだか僕の一部分ではないかと思ふやうなのだ。僕の臟腑か何かでそれが無くなつてしまふと僕のこの世に生きてゐようと思ふ意志、生きてゐる價値のあるやうに僕を動かしてゐる原動力を持つて行かれたやうになつてしまふのだ。解剖學でいふ、生活の結節といふやうなものを僕は、妻の體の中に預けてしまつてゐるやうな心持ちがするのだ。

教員。それはさういふ風になる因縁があるのかも知れないよ。

畫工。どうしてこんな風になつたのか知らん。妻は獨立してゐる人間で、自分だけの考へを持つてゐるのだらう。それに僕が出會つたのだ。その時は僕は何んでもないのだ。謂はゞ妻が藝術家のひよつこであつた僕を育てゝ呉れたのだ。

教員。それでもしまひには君が細君の思想を發展させて細君の方を育てるやうにしたのだらうが。畫工。いや。さうはいかない。妻の發展は何んだか行き留りになつたといふやうな形なのだ。そこで僕がそれを獎勵する、後から押すといふやうな事があつただけだ。

教員。さうさ。細君の書くものは、あの處女作以來好くはならない。退歩したといつては當らないか知らないが、何にしろ進歩はしない。變だよ。併し初めのは材料が好かつたんだからねえ。(間)何んでも主人公は先の御亭主ださうだ。君はその男を知らないのかい。何んでも馬鹿な奴だといふではないか。

畫工。僕は一遍も會つた事はないよ。なぜといふのに丁度僕が妻と心易くなつた時は、妻の先の亭主は六ヶ月間旅行をしてゐたのだから。何んでも妻の書いてる處で見ると珍らしく馬鹿な男であつたと見えるよ。

(間) 妻の書いたのは寫生に相違ないからね。

教員。それは僕もさうだらうと思ふ。(間) 併し何んだつて、あんな男を亭主に持つたのだらう。

畫工。それは知らずに持つたのだらうよ。人物といふものは、後からでなくては知れないものだといふではないか。

ないか。

教員。それだから後から結婚するが好いかも知れない。(間) 兎に角、先の亭主といふ奴は馬鹿な癖に壓制をしたに違ひない。

したに違ひない。

畫工。どうして。

教員。それは亭主といふものは、皆壓制をするものだからねえ。(談話の一步を進むる調子) 君だつて壓制家だ。

畫工。僕が。僕は妻に勝手に出這入りをさせてゐるではないか。

教員。あたりまへさ。そんなら壓制をするといへば、部屋へ入れて錠でも掛けて置くといふ事になるのかね。

夜なんぞ歸つて來ないのは、君は平氣かい。

畫工。さうは行かないよ。

教員。見給へ。(調子を變ふ) 正直に言へばそんな風だと君は馬鹿氣で見えるのだ。

畫工。なぜ。自分の妻に信用を置いてゐると馬鹿氣で見えるかねえ。

教員。さうだよ。君はたしかにその爲に馬鹿氣て見えるのだ。

畫工。(怒聲的に) さうだらうか。君、さう聞けば、僕は何んとか決心をしななければならない。

教員。そんなに激してはいけないよ。又發作が来るからね。

畫工。それでも僕が夜出て歸らなくても妻は馬鹿氣て見えないで、妻が夜出て歸らないと僕が馬鹿氣て見えるといふのはどういふわけかね。

教員。どういふわけも何もあるものか。兎に角事實がさうなのだ。君がなぜさうだらうなんぞと氣樂に考へてゐるうちに飛んだ過ちが出来るよ。

畫工。どんな過ちが。

教員。一體女といふものは、壓制家の亭主をでも、亭主を持つのは自分の自由を得ようとして持つのだ。亭主といふ看板があれば何でも出来るのだからね。

畫工。さうさ。

教員。君なんぞも看板なのだ。

畫工。僕が。

教員。君も亭主である以上は。

(畫工ぼんやりして何か考へてゐる。)

さうではないか、君。

畫工。(不安の様子)さうさねえ。(間)妙なもので長い間女と一しよになつてゐて、その女がどんなものだから、

その女と自分との關係はどんな風だか、少しも考へずにゐて、或時ふいと考へ初めると、考へて見ねばならないやうになるから妙だね。(間)君は僕の友人だ。今まで男の友達で君のやうに親しくなつたのはない。この八日の間に君は僕に生きて世に立つて行く勇氣を取返へさせて呉れた。君の磁石力が僕の體へ傳はつたやうな心持がする。君が時計師で、僕の頭の中のからくりを直してぜんまいを巻いて呉れたやうな心持がする。何んでも君のお蔭で僕は物をはつきりいふやうになつたやうだ。少くも僕が又昔の時のやうな聲で物を言ふやうになつたのは事實に相違ないよ。

教員。僕にもさう見える。君はどうしてさうなつたと思ふんだい。

畫工。さうさねえ。いつも女とばかり話をしてゐると細い聲で物を言ふやうになるかも知れん。兎に角妻はいつでもそんなに吐鳴らなくてもいゝと言つた。

教員。さうだらう。さう言はれて段々聲を細くして尻に敷かれてしまふのだ。

畫工。そんな詞を遣ひ給ふな。(考へて見る様子)實はそれよりもつとひどい目に逢つてゐるのかも知れない。併しその事はまあ今言はずに置いて呉れ給へ。(間)何を言はうと思つたのだつけ。さうだ。君がこゝへやつて來て、藝術といふものに關して僕の目を明けて呉れたのだ。實は餘程前から繪畫が氣に入らなくなつてゐた。どうも僕が表現しようと思ふ事を正しく表現するには、繪畫は不適當だといふやうな感じがあつた。處へ君がやつて來て解釋を與へて呉れた。繪畫は所詮現代の藝術家の欲望を充すには足らないとい

ふわけが、君の議論で分つた。僕は今まで盲であつたのが、急に目が見えるやうになつたと同じで、もうこれからは、色彩をもつて製作をして見ようといふ氣はなくなつたのだ。

教員。そこで君はもう決して繪は描かないといふ事が確實かね。又繪を描いて見たいといふ病氣が再發しはしないかね。

畫工。いや。もう決してその氣にはなれない。(間)僕は試して見たよ。君があゝの議論をした晩に、僕は寐てから繰返して考へて見た。君の論點を一々丁寧にあたつて見た。さてその晩はとう／＼寐ないで、翌朝になつて、頭がはつきりとして來た處で、僕は稻妻に射られたやうに若しや君の言つた事が違つてゐるはしまいか、僕にはまだ繪を描いて見るといふ氣がありはしなにかと思つた。僕は飛び起きてパレットと筆とを出して描いて見ようとした。處が駄目だ。今まで描いてゐた繪がまるで、繪の具をぬすくつただけのものにしか見えない。僕はどうして今までこの中にカンバスと繪の具との外に何物かがあるといふ事を信ずる事が出來たのだらう。どうして自分でそんな事を信じて人にそれを同じやうに信じて貰はうと思ふ事が出來たんだらう。僕の目の前に立ち籠めてゐた霧が晴れた。僕はもう繪といふものを描く事は出來ない。丁度大人になつたものが、もう一遍子供になる事が出來ないと同じわけだ。

教員。うむ。そこで君にも時代が實物を要求する、手につかまれるやうな物を要求する、藝術の形式は彫刻でなくてはならない、三方に廣がり有してゐるものでなくてはならない、物體でなくてはならない、といふ事が分つたのだね。

畫工。(ふたしかに。)さう。三方に廣がり有する。うむ。一言でいへば物體でなくてはならないのだ。

教員。そこで君は彫刻家になつてしまつた。さうではない。君は素から彫刻家であつたのを迷つて悟らずに

ゐたのだ。丁度道に迷つた人が本當の道を人に教へられたやうなものだ。(間。)どうだね。興味を持つて爲事をする事が出来るかね。

畫工。いや。お蔭で生き戻つたやうな氣で爲事をする事が出来るよ。

教員。何をやつてるか。僕が見ても好いかね。

畫工。女の體だ。

教員。成程。これがモデルなしに行くかね。こんなに、活氣のあるやうに。

畫工。(沈みたる聲)なに、或人に似てゐるのだよ。どうもあの人が僕の體の中に沁み込んでゐるから不思議

だ。僕の體があゝの女體の中に這入りこんでゐるばかりではないと見えて。

教員。それは、細君の體が君の腹に沁み込んでゐるのは不思議はないよ。(間。)君は輸血法といふ事を知つて

ゐるかね。

畫工。輸血法だつて。人の血を體の中へ注ぎ込むのだらう。

教員。さうだ。君は自分の血を細君に皆注ぎ込んでしまつて、其代りに細君の影が君のうつろな體の中に入

つて來てゐるのだ。僕は君の拵へかけてゐるこの人物を見ると、これまでぼんやり想像してゐた事が、は

つきり分つて來るよ。君は細君に死ぬ程惚れてゐるのだね。

畫工。まあ、さういつたやうなものだよ。僕が妻だか、妻が僕だから分らない。妻が笑へば僕も笑ふ。妻が泣けば僕も泣く。さういへば可笑しい事があつた。妻が子を生む時、僕は腹が痛んだよ。

教員。うむ。君吃驚してはいけないよ。僕は今の様子を見てゐるが、君には癩癩になる兆候があるねえ。

畫工。(吃驚す)僕がか。どうして。

教員。僕の弟がね、癩癩になつたのだ。房事が過ぎて。

畫工。その兆候といふのは。

(これより教員は目に見ゆるやうに力を入れて描寫せんと努む。畫工は極めて注意して聞きをり、覺えず教員のする科を眞似す。)

教員。實に目もあてられない様子だつたよ。併し聞いたら君が氣分を悪くするかも知れないから委しく話すのは止さうよ。

畫工。(心配氣に)好いからどうぞ話して呉れ給へ。

教員。好いかい。弟は詰らない小娘に迷つたのだ。毛をぢぢらせた、鳩のやうな目付をした、顔が子供で、心が天使のやうな娘なのだ。そいつと結婚した處が、弟はいくぢもなくその女に自由にせられてしまつて、何んでも女が持ちかければそれに應じなければならぬといふ風になつたのだ。

畫工。ふむ。

教員。その結果、その天使のお蔭で弟は天に昇らなければならぬやうになつた。併し天に昇る前に十字架